
青い筒

かめれおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い筒

【コード】

N8959L

【作者名】

かめれおん

【あらすじ】

短編。でも続く。かも。

ひんやりとした灰色の壁に囲まれた地下室に古い、とても古い15センチほどの筒があった。

それは、けして触れてはならない秘密の筒。

シンプルな青色のその筒は、

箱と箱の隙間に紛れて、目に付かないところにそつと置かれている。光もあたらず、風もあたらず、なのに湿気臭くもなく、なぜか新鮮な空気を保っている。

その地下室は、とある町のその奥のとある村にある小さな家であったが誰もが

その存在を知ることにはなかった。

いや、誰にも知られないようにしたはずだった。

小さな家の住人は2ヶ月前心臓発作で亡くなっていた。

住人の名はナゴールじいさん。一人身でこれといった特徴のない爺さんだった。

特に誰ともトラブルを起こすわけでもなく、適度な距離感を持つことと上手い爺さんだった。

唯一人、ナゴール爺さんが、孫のように可愛がっている子供がいた。彼の名はクルス。ナゴール爺さんの家の2つ隣に母親と二人で住んでいる。

生まれたときから父親が居なかった彼にとって、未知にあふれた世界の不思議を教えてくれたのが

ナゴール爺さんだった。

今日は母親に頼まれて、身寄りのない爺さんの部屋の掃除に来たのだ。

たいした財産もないので、村長には許可をとってあるそうだ。といつても、片付いているシンプルな部屋は誰かが居たとは思えなかった。

埃などはらい、次の住人が入るまでの間キレイに保つだけでよさそうだ。

一昨日は高いところを拭いて、昨日は家具を拭いた。

今日は墨から墨まで床を拭いていった。

そこまですることは無いのだろうが、他にすることがない。帰ったつてどうせ、母親の手伝いをさせられるだけだ。

ふと、机の脚が少しずれて跡のような黒い汚れが残っているのが見えた。

よくふき取るうとして机をさらにずらす。

よく擦ると、カチツと音がした。

ふっと食器棚の下の扉から風が吹いて頬をなでた。

恐る恐る棚を開けると、ぽっかりあいた穴に階段が下まで続いていた。

狭い入り口から降りないといけなかったため、クルスは後ろ向きにそろそろと降りていった。

入り口からさす光で、地下室に物がいろいろ置いているのがわかる。ここも片付けないと次の住人が困るだろうと、端っここら何があるのかを確認し始めた。

箱をひとつ一つ開けてみる。

たいしたものは入ってなかった。

季節違いの服や使われなくなった食器類・・・。

一人暮らしの老人のものにしては量が多いが、クルスにはそこまで気づかなかった。

そして、箱と箱の隙間に青い15センチほどの筒がそつと置かれてあった。

なにげなく筒をとり、茶葉を入れてる筒のようだと思いつながらもこんなところに置いてたら、腐ったり湿気たりするんじゃないかと心配し

ポンと蓋を開けた。

中を見ると・・・茶葉はなく、唯真つ暗だった。

地下室はそこまで暗くないが、普通より暗いから見えないのだろう
と思い、

クルスは左目を閉じ、右目だけでよく中を覗き込んだ。

ヒュツという音と共に

右目からクルス全体を暗闇が包み込み筒の中へ引きずり込んだ。

クルスの持っていた筒の蓋は地面に落ちることなく糸でもついていたかのよう

に筒本体の元へ収まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8959/>

青い筒

2010年12月16日05時53分発行